

リサーチ最前線：博士論文の紹介

項目：内戦

タイトル：人脈ネットワークとしての武装勢力—シエラレオネ内戦におけるカマジョー
/CDFの生成と変容に関する研究—

著者：岡野英之（おかのひでゆき）

博士論文の提出先：大阪大学大学院人間科学研究科

著者の現在の所属：日本学術振興会特別研究員・大阪大学大学院国際公共政策研究科

<英文要約>

The research titled as “An Armed Faction as a Human Network: Formation and Transformation of the Kamajor/CDF in the Sierra Leonean War” is a PhD thesis submitted to Graduate School of Human Sciences, Osaka University. This thesis argues on a pro-governmental force in the Sierra Leone War, Civil Defense Force (CDF). Sierra Leone, a small country located in West Africa, experienced a severe civil war from 1991 to 2002. This thesis argues on how human networks in and around the CDF is constructed in the changing situations of Sierra Leone.

The aim of the thesis is to capture the dynamics of civil wars in Sub-Saharan Africa (thereafter “Africa”). I deal with Sierra Leone as one of the cases. Africa experienced the rampant breakouts of civil wars since the end of the Cold War. Scholars began to research on civil wars as well in this period. Some scholars have engaged in practical researches on humanitarian assistance and peace buildings. Other scholars have tried to understand deeply on what really happens on the ground. Their ‘findings’ elucidate local aspects of civil wars. Some of which are never noticed by practitioners working on the ground.

Sierra Leonean War began in 1991 by the incursion of the Revolutionary United Front (RUF). The CDF originates from ‘Kamajor’, local militia against the RUF. Kamajors were organized by Mende people for community defense. The government used Kamajors for counter-insurgent operations. Kamajors, which originally acted independently for each communities, gradually integrated to one faction in the course of the war. Eventually, Kamajors had developed into one pro-governmental paramilitary force, the CDF. The CDF is an umbrella organization that integrates local militias of other ethnic groups.

This research chronologically describes on how the Kamajor/CDF was formed, transformed and disbanded. I pay attention to human relations and human networks in order to understand the process. The discussion of human networks is popular among political sciences discussions on African politics. Scholars tried to understand how states in Africa, especially ones in which state apparatus are dysfunctional, are governed and ruled. Some scholars pay attention to human networks (Chabal and Daloz 1999; Jackson and Rosberg 1982; Medard 1982; Lemarchand

1972). These scholars claim the importance of human relations among political elites and other important figures for understanding political phenomena. Following the discussion, I focus on human relations and human networks constructed among cadres, leaders and commanders of the Kamajor/CDF. I describe the chronological changes of the Kamajor/CDF focusing on human network inside the group.

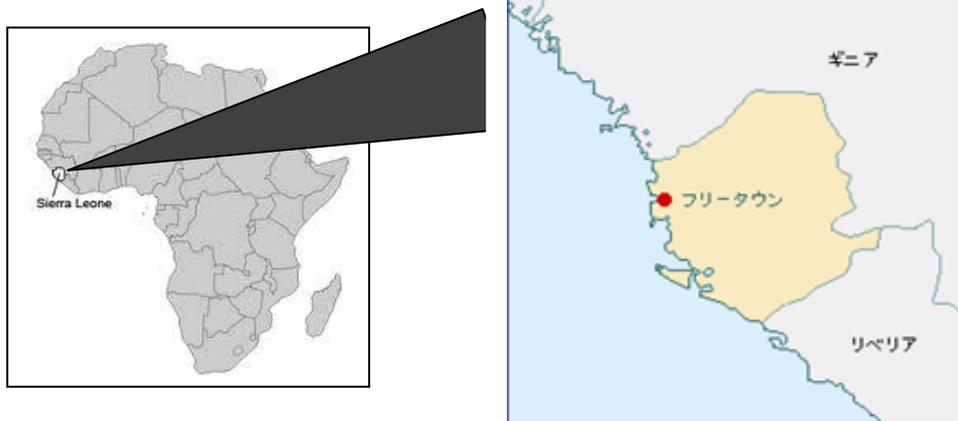
In the network, the threads of human relations are interwoven by subsuming the local, the international and the global dimensions of the war. These networks develop in the course of the war. In the changing situations, some of the relations are maintained, but some relations are disintegrated.

本論文は大阪大学大学院人間科学研究科に 2012 年度に提出された博士学位論文である。西アフリカの小国、シエラレオネの内戦(1991-2002 年)で台頭した政府系勢力「カマジョー/CDF」が形成されてから解体されるまでのプロセスを記述している。理論の構築や事象の分析よりも、一次資料(文書資料や口述資料)に基づいた過去の出来事の再構成を重視した論文である。

1990 年代のアフリカでは内戦が頻発したとされる。民主化や経済自由化といった変化に耐えきれずに多くの国が内戦を経験することとなった。それを受けて多くの研究者が内戦を研究し始めた。政策を志向する研究者達が平和構築や人道的介入を論ずる一方、現地で何が起こったのかを明らかにする研究者たちもいる。政治学では、武力紛争の発生するメカニズムを把握しようとしてきた(Reno 1998; 武内 2009)。また、文化人類学では、いかに紛争下で人々が生きてきたのかを明らかにしてきた(栗本 1996; Richards ed. 2005)。こうした研究の蓄積により、平和構築の現場で働く実務家にも見えてこなかった現地の動態が徐々に明らかにされていった。

筆者は、内戦後のシエラレオネにてフィールドワークを行い、かつて武装勢力の幹部

図 1. シエラレオネの位置



(出典) http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/s_leone/index.html に基づき筆者作成

であった者や元戦闘員に聞き取りを重ね、シエラレオネに生きる人々の視点から内戦の動態を理解しようと試みた。その成果をまとめたのがこの論文である。

1. 背景と問題の所在

シエラレオネ内戦は、1991年3月、反政府組織「革命統一戦線」(Revolutionary United Front: RUF)が隣国リベリアからシエラレオネ領内に侵攻したことで始まった。この内戦は2002年1月の公式的な終結宣言をもって終結したとされる。この内戦の犠牲者は、約7万人におよび、難民ないし国内避難民となった人々は260万人を超えた。これはシエラレオネ国民の半数を超える数である。

本研究の考察対象は、その内戦で台頭した勢力「カマジョー/CDF」である。「カマジョー」(Kamajor)とは、人口の約30%を占めるメンデ人(Mende)によって作られた自警組織であり、CDF(Civil Defense Force/市民防衛軍)とはカマジョーが母体となり、他民族の自警組織を統合することで組織された政府系勢力である。

RUFは、1994年頃から農村に急襲をかけ、略奪や誘拐を繰り返すようになった。RUFからの身を守るため各地の首長区(chiefdom)では自警組織が作られた。首長区とはシエラレオネの行政区分であり、植民地統治下の行政区分を受け継ぐ形で現在まで存続している。その行政の長は大首長(paramount chief)といわれ、かつてその地域で王だった家系に属する。イギリス植民地政府が勢力圏を拡大し、シエラレオネの領土を支配下に治めるようになる中、各地に林立する王国の王を植民地政府の行政官として取り込んでいった。それが大首長であり、この制度は独立後も存続された(落合2007)。こうした首長区の長が自警組織のリーダーシップを握った。

カマジョーは、それぞれの首長区で活動していたものの、統合・拡大を重ねた。シエラレオネ政府は、そのカマジョーを動員し、RUFとの戦いに用いた。最終的にカマジョーは他民族の自警組織をも統合した政府系準軍事組織「市民防衛軍」(Civil Defense Force: CDF)を形成するまでに至った。すなわち、カマジョーは、内戦の中でひとつの勢力CDFへと収斂していったのである。いかにカマジョーはCDFへと収斂していったのか。本研究は、その変容を記述した上で、その変容に対する理解を試みる。以降、本研究が対象とする組織を指す際、「カマジョー/CDF」という表記を用いることにする。

2. 先行研究と分析視角

(1) 先行研究：アフリカ国家論における人脈ネットワークの研究

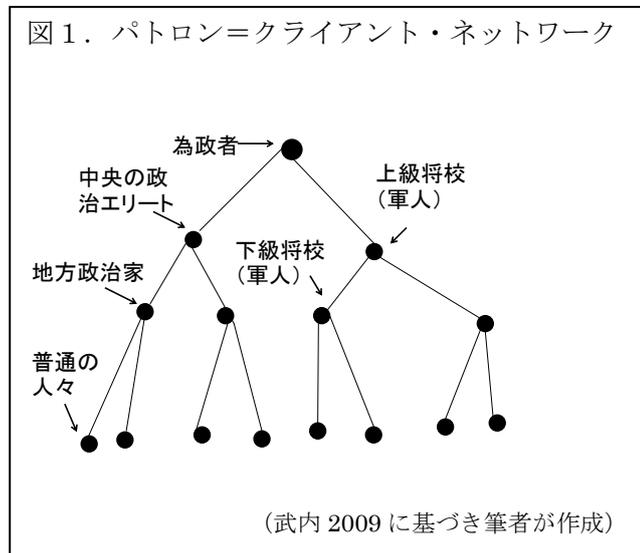
カマジョー/CDFの分析にあたり、本研究ではアフリカ国家論に依拠した分析視角を設定している。アフリカ国家論とは、アフリカ諸国で共通して見られる国家の在り方を追究する研究群である。1970年代後半以降、アフリカでは公的な制度や組織が機能不全に陥っている国家が散見されるようになった。アフリカ国家論ではこうした国家は

いかに統治されているのかを論じている。

その議論の中には、制度から国家を分析するのではなく、インフォーマルな側面に注目することで国家の統治を検討する研究がある。そうした研究には、「人脈ネットワーク」を分析枠組みとして政治現象への理解を試みた研究も多い(Chabal and Daloz 1999; Jackson and Rosberg 1982; Medard 1982; Lemarchand 1972)。

バヤール(Jean-François Bayart)によると、アフリカ諸国家では社会のあらゆる階層が人脈によって結びつけられ、そのネットワークが政治を左右するという。人と人とのつながりは、相互扶助集団、同郷会、友人・親族関係、政治・宗教・職業団体、同好会から商売上のつながり、バーでの飲み友達などあらゆる場所で形成される。そうした人脈を駆使することによって国家は機能しているとする。すなわち、バヤールは横の人脈ネットワークを重視したのである(Bayart 1993)。

一方、武内進一は、パトロン＝クライアント関係という縦の人脈を重視した。パトロン＝クライアント関係とは、立場の違う二者に見られる相互依存関係である。ここでは、＜親分＝子分関係＞と理解してもらえればよい。パトロン(親分)は自ら持つ影響力や資源を用いてクライアント(子分)に保護や便宜を提供する一方、クライアントはその見返りとしてパトロンの意思に沿った行動をする。



誰かにとってのパトロンは誰かにとってのクライアントである重層的な関係を通し、パトロン＝クライアント関係は為政者から市井の人々まで繋がっている。武内は、こうした「パトロン＝クライアント・ネットワーク」によって為政者は国家の統治を維持していると主張する(図1、以下「PC ネットワーク」と略称する)。

武内はさらに 1990 年代にアフリカで多発した武力紛争も PC ネットワークの分裂として説明できるとする。すなわち、国家をまとめあげ、統治する道具であった PC ネットワークが分裂したことにより、武力紛争が勃発したと理解するのである。有力な政治エリートが為政者に従属しなくなる。すると、彼らの間での権力闘争が勃発し、それがエスカレートすることで武力紛争へと発展するというのである。

シエラレオネの内戦はこの構図に当てはまるわけではない。ただし、シエラレオネがパトロン＝クライアント関係で成り立つ社会があることはしばしば指摘されており、

カマジョーの中でもパトロン＝クライアント関係に基づいた人間関係があることは指摘されている (Hoffman 2011)。だとすると、カマジョー/CDF では、組織をまとめあげる PC ネットワークが徐々に組み上げられていると理解できはしないだろうか。もし、そうだとするならば、カマジョー/CDF に見られる各レベルのパトロンを追うことで、PC ネットワークが汲み上げられる様が確認できるはずである。

(2) 分析視角：3つの分析視角—カマジョー/CDF の人脈ネットワークを追う—

カマジョー/CDF の人脈ネットワークはいかに組み上げられていったのか。おそらく、そのプロセスは単線的なものではない。ある者がパトロンに登り詰める中で、ある者は没落する。また、パトロンの地位を巡る権力闘争も様々なレベルで発生しているだろう。そうした動態を考察するために、本研究では3つの分析視角に注目しながらカマジョー/CDF の変容を追った。

第一に、人脈である。すなわち、いかに人と人とが繋がっていくかを見ることで、いかに組織が変わっていったのかに注目する。アフリカ国家論では、人脈に注目することで、政治現象・社会現象の動態を明らかにしてきた。本研究もそれに則り、カマジョー/CDF が変容するに当たり、カマジョー/CDF で重要な役割を果たした人物たちがどのように繋がっていったのかを辿っていく。

第二に、人脈の背後にある権力闘争に注目する。武装勢力内においてリーダー層の間では権力闘争が見られ、幹部構成はしばしば入れ替わると考えられる。そのため、人脈だけでなく、その背後にある権力闘争を見ることで武装勢力の変化を把握しようとした。

第三に、組織の在り方に注目する。特に、①資源（軍事物資・生活物資・資金）の調達方法、②戦闘員の動員方法、③命令系統や組織構造、の三点に注目する。なぜなら資源や人員をより多く入手できる人物はパトロンとしての地位を高めることができ、組織に対してより大きい影響力を持つことができると考えられるからである。

本研究では、これら3つの分析視角に注目しつつ、カマジョー/CDF の変容を記述することにした。

3. 調査方法

カマジョー/CDF の変容を記述するに当たり、既存の文書資料および聞き取り調査からデータを収集した。聞き取り調査では、カマジョー/CDF の関係者からライフストーリーの聴取を重ねた。それを文書資料（シエラレオネ特別裁判所 [Special Court for Sierra Leone] の公判記録、真実和解委員会 [Truth and Reconciliation Commission] によって編纂された内戦正史、NGO による人権侵害報告書等）と照らし合わせることでカマジョー/CDF の変容に対する理解を試みた。なお、シエラレオネでは英語が公用

語であり、英語を基盤とするクレオール言語が話されている（地元の人々はそれを「クリオ」[Krio]と呼ぶ）。そのため、聞き取り調査は、英語およびクリオ語で行った。

4. カマジョー/CDFの変容(概略)

調査で明らかになった変容の概略は以下の通りである。

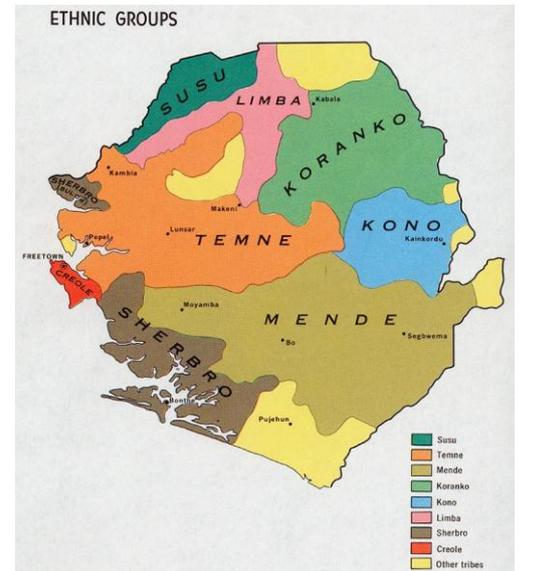
1991年3月、RUFが侵攻することによって内戦が開始した。RUFの侵攻に直面したモモ政権(Joseph Saidu Momoh)はRUFに対処するため、さまざまな方策を取った。その中には、国軍の増員、外国への支援要請、リベリア人難民の武装化、現地住民の動員が挙げられる。中でも、当時、第一次リベリア内戦(1989-96年)から難を逃れてシエラレオネに滞在していたリベリア人難民の動員は後のカマジョーの変容に大きな影響を与えることになった。

1994年頃、RUFはゲリラ戦を取るようになった。農村部へと急襲をかけてはすぐに撤退するという作戦をとったのである。特に、メンデ人が多く住むシエラレオネ東南部はゲリラ戦の中心地となった(地図2)。それに対抗する形で住民は自警を始めるようになった。その結果、メンデ人居住地域では首長区を基盤として多くの自警組織が作られた。

メンデ人の一部の自警組織は、その成員に伝統的な信仰に依拠した儀礼を施すようになった。その儀礼を受けると自由に姿を消し、銃弾を跳ね返すことができるようになると思われた。そうした儀礼を受けた者は「カマジョー」と呼ばれるようになった。メンデ語でカマジョーとは「狩人」を意味する。自警組織はカマジョーと呼ばれるようになり、カマジョーとなるには加入儀礼を受けなければならないという慣行が定着した。

カマジョーの儀礼を施したのは伝統的な呪医である。彼らはそれまで祈祷や病気の治療などの役割を農村部で担っていた。彼らが内戦に対応する形で考案したのがカマジョーであり、カマジョーの加入儀礼である。加入儀礼はメンデ人の間に広まり、メンデ人の自警組織はおしなべて「カマジョー」と呼べる存在になった。

地図 2. シエラレオネにおけるメンデの分布域



(出典: <http://www.lib.utexas.edu/maps>)

1996年頃から、カマジョーは首長区を越えた連携を繰り返す。各地のカマジョーが連携と統合を繰り返し、大きな勢力へと拡大するカマジョーも見られるようになった。時のアフマド・テジャン・カバー(Ahmad Tejan Kabbah)政権は、彼らに武器を提供し、対RUF戦に動員した。

しかし、1997年5月25日に発生した軍事クーデターによりカバー大統領はギニアへと亡命した。クーデター後に設立された軍事政権AFRC(Armed Forces Revolutionary Council/軍事革命評議会)はRUFを政権に迎え入れ、連合政権を組んだ。内戦を終結させ、軍事クーデターを正当化しようとしたのである。一方で軍事政権は、カマジョーに解散を命じた。それに対して、カマジョーは、カバー政権復帰を掲げて敵対することになる。その頃、カバー政権は隣国ギニアで亡命政権としての立場をとっていた。

カマジョーは、民主主義の復権とカバー政権の復帰をプロパガンダとして掲げた。彼らは、各民族の自警組織が連帯することでカバー政権復帰を試みるという大義名分を押し出すために「市民防衛軍」(CDF)を名乗るようになった。カマジョーと名乗ると、メンデ人性が強く強調されてしまうからである。カマジョーは、かつてシエラレオネ政府に動員されたリベリア人難民を吸収し、勢力を拡大した。さらに、カマジョーは軍事介入を実施したナイジェリア軍と共同作戦を図ることでAFRC/RUFを打倒した。カバー政権は、1998年の3月に政権の座へと復帰した。

カバー政権が復帰して以降、CDFは政府系勢力として形を整えていく。カバー政権復帰後は、カマジョー出身者が幹部となり、他の民族をCDFへと統合していった。また、儀礼をおこなう呪医らも組織化された。しかし、RUFの活動が弱まり、平和構築の流れが進展するにつれ、CDFは解体されていくことになった。

(2) ライフヒストリー

博士論文ではカマジョー/CDFの変化を詳細に追っているが、本稿の性質上、概略のみを提示せざるを得ない。だが、概略ならば、すでにいくつかの研究がすでに出版されている(Alie 2005; Muana 1997)。そこで本研究では、一人の戦闘員のライフヒストリーを紹介する。本研究内ではいくつもライフヒストリーを提示しているが、これはその中の一つである。カマジョーの一般戦闘員の経験を最も反映している一人の若者の話を提示した。彼は地方都市ボー(Bo)で育った。父も母もメンデ人である。カマジェイ首長区(Kamajei Chiefdom)の出身である。

以下のライフヒストリーは聞き取った語りを筆者が要約したもので、語りをそのまま書き起こしたものではない。また、〔キッコウ括弧〕内は語り手が語っていない補足情報である。

私は小学校の頃、〔首都の〕フリータウンで過ごした。おじが政府の役人であり、現金収入があったため、学費の面倒を見てもらっていた。しかし、1992

年の軍事クーデターをきっかけに、おじはその職を解雇された。おじを頼ることをできなくなった私はボーで小学校に通うことになった。その頃、戦争はまだボーまで来ていなかった。国内避難民は町にいたがゲリラの危険はなかった。

〔カバー大統領が亡命することになった 1997 年 5 月 25 日の〕クーデターの後、私はカマジョーとなった〔この頃彼は中学生である〕。クーデターの後、ボーには国軍が跋扈していた。この頃、軍とカマジョーは敵対していた。女性や年配の男性なら〔メンデ人であっても〕問題ないが、〔メンデ人であるボーの〕若者は国軍に知り合いがない限りカマジョーだと疑われ、虐待にあった。身の危険を感じ、カマジョーになることにした。〔カマジョーになるには呪医による加入儀礼を受けなければならない。加入儀礼を受けるためには大首長からの推薦が必要だった。そこで父母の出身地である〕カマジェイ首長区へ行くことにした。

私はスカウト〔ボーイスカウト〕を当時やっており、近隣の村で人々を助けたり、けがをした兵士の治療をしたりしていた。そこでスカウトの制服を着て国軍の検問を越え、その後、ガールフレンドに荷物を持ってきてもらった。大きな荷物を持っていれば怪しまれるからだ。町のはずれで荷物を受け取り、ひとりで歩いてカマジェイ首長区へと向かった。一日歩けば着ける距離だ。

カマジェイ首長区には何度も遊びに行ったことがある。学校が休みの時やクリスマスは帰省していたからだ。カマジェイ首長区に着くと大首長の推薦を受け、加入儀礼を受けることになった。村人約 50 名とともに、〔呪医である〕ママ・ムンダの社（やしろ）(shirine)へと向かった。加入礼儀には他の村からの者も多数いた。二日間の儀礼を受けた後、カマジェイ首長区へと帰り、そこで 14 日間身を清めた。

当時、タリア〔地名, Talia, Bonthe Disctrict〕にいるカマジョーがマンパワーを必要としているという噂があった。「〔カマジョーのリーダーとして台頭してきた〕ノーマン首長がマンパワーを必要としており、タリアに集まれ」と命令したというのだ。こうしてカマジェイ首長区からも人が送り込まれることになった。私もそれに同行し、タリアまで徒歩で向かった。

タリアでは軍事訓練を受けた。銃の組み立てや襲撃方法、撤退方法がその内容である。軍事訓練を行ったのはナイジェリア軍軍人である¹。その後、我々は「黒い 12 月作戦」(Operation Black December)を行うことになる。この作戦は交通を遮断することで軍事政権を弱体化させようというものだ。ボー＝フリータウン幹道で待ち伏せし、軍の車を襲撃するんだ。そうすれば、ボーやそれより奥地にある国軍には物資が届かない。そうした形で我々は攻撃を行った。しかし、二週間もすると食料もなくなるし、弾丸もなくなった。そこで、一度タリアへ帰ることになった。・・・(その後も、参加した軍事作戦の話が続く)・・・〔カバー大統領が復帰し、カマジョーが政府系勢力 CDF として首都に基地を持った時、〕私もフリータウンにうつった。しかし、基地には住まず、〔小

¹ ナイジェリア軍は ECOMOG (西アフリカ経済共同体停戦監視団) としてシエラレオネに駐屯していたが、単独でカマジョーに軍事支援を提供していた。

学校の時、養ってもらっていた] おじのもとに身を寄せた。基地に住む連中は田舎者でガラが悪い。だから、あまり基地には住みたくなかった。軍事作戦に呼び出された時のみ基地に行った。内戦も落ち着くと、銃はベッドの下に埋めた。必要な時はいつでも使えるようにだ。そのうち、内戦は収束した。私はそのままフリータウンに滞在し、おじの支援のもと中学校を終えた。

(2012年9月12日、筆者による聞き取り)

このライフヒストリーは百件以上取ったライフヒストリーの一部である。ここでは分かりやすくするために固有名詞や人物名をできるだけ省略したが、実際には、語りの中に現れる人名や地名を詳しく聞き取っている。その情報をもとに次の調査地、聞き取り対象者を決め、次々と聞き取り調査を行いながら、全体像を掴んでいった。

5. 考察結果

カマジョーで重要な役割を果たした人物たちは、ローカル、ナショナル、トランスナショナル、グローバルな人脈を有しており、それらを駆使することによって活動してきた。彼らは、人脈を利用し、現状に対する打開策を模索する。その過程で、これまでは無縁であった人々が接合されていった。それを繰り返すことで、複数の人脈ネットワークは統合を重ね、政府系勢力 CDF というひとつの人脈ネットワークとなった。CDF のリーダーとして登り詰めた者は、勢力を運営するための資源を獲得するチャンネルを維持し、それを従属者に分配することによってリーダーの立場を保った。さらに、自らを中心とした人脈ネットワークを維持するため、脅威となる人物を遠ざけ、排除しようとした。その様子はアフリカ国家論が描いてきたインフォーマルな統治の様子を彷彿とさせる(cf. Chabal and Daloz 1999; Reno 1998)。

一方、戦闘員となった人々は、小規模なネットワークが統合される中で、各地に分散するネットワークを渡り歩いた。上官を変えたり、所属するグループを変えたりしたのである。彼らは、直接の上官にのみ忠誠をつくす。彼らは、より多くの資源の分配にあやかるとのことができる上官を探した。CDF は政府系勢力として形を整えていったものの、その戦闘員は流動性にあふれていた。すなわち、パトロン＝クライアント関係は可変的であり、中にある構成員が入れ替わりながら維持されていたのである。

本研究はカマジョー/CDFの変容を記述している。その記述は、長期化する内戦の中で、いかに新しい勢力が台頭し、変化をしているのかの一例と捉える事ができる。武装勢力は明確な組織構成を持たず、戦闘員も入れ替わる。その中でいかに武装勢力が維持されてきたのかを本研究では知ることができる。

6. 筆者の活動

筆者は大学生の頃、国際機関への就職を目指していたが、インターンを通し、国際機

関やドナー機関の報告書が必ずしも現地の特性を把握したものではなく、スタッフも現状を把握しないままオペレーションを実施していることに疑問を覚えた。現地で何が起きていることを知ることの重要性を実感し、文化人類学の立場から内戦を研究することとなった。現在は、日本学術研究会特別研究員として大阪大学に在籍し、研究に従事している。

本博士論文のための研究を通して、内戦の経験をローカルな立場から考察した。そこから得られたのは、彼らが経験してきたことは必ずしも一般的に語られていることとは合致しないということである。やはり、実際に現場で何が起こったかを理解しなければ、内戦を理解することはできない。

今後のキャリアとしては、平和構築のプロセスをじっくり顧みるような研究をしたいと考えている。平和構築期の体験を、武装勢力の幹部、平和構築に参加した国際機関の職員、平和維持部隊に参加した兵士、ローカル NGO のスタッフなど、平和構築を見てきた様々な人々に聞き取り調査をすることで、いかに平和構築が進展したのかを考察したい。政策は意図通りに動くわけではない。そして、現場では様々なアクターの思惑が反映している。そうした動きを考察することは、平和構築に従事している機関でも、学術機関でもなされていない。

今後の平和構築を考えるためには、机上で行う理論の構築よりも、実際に参加した人々の証言を集め、現場で何が起こったのかを理解することのはずである。そうした調査を通し、筆者は国際社会に貢献していきたいと考えている。

主要参考文献

- 落合雄彦 (2007) 「分枝国家シエラレオネにおける地方行政—植民地期の史的展開—」『アフリカ研究』第 71 号、119-127 頁。
- 栗本英世(1996)『民族紛争を生きる人々—現在アフリカの国家とマイノリティー』京都：世界思想社。
- 武内進一 (2009)『現代アフリカの紛争と国家 ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』東京：明石書店。
- Alie, Joe (2005) “The Kamajor Militia in Sierra Leone: Liberator or Nihilists?” in Francis, David J. (ed.). *Civil Militia: Africa's Intractable Security Menace?* Burlington: Ashgate.
- Bayart, Jean-François (1993) *The State in Africa: The Politics of the Belly*. London: Longman.
- Chabal, Patrick and Jean-Pascal Daloz (1999) *Africa Works: Disorder as Political Instrument*. Oxford: International African Institute in association with James Currey, Bloomington: Indiana University Press.

- Hoffman, Danny (2011) *War Machine: Young Men and Violence in Sierra Leone and Liberia*. Durham and London: Duke University Press.
- Jackson, Robert H. and Carl G. Rosberg (1982) *Personal Rule in Africa: Prince, Autocrat, Prophet, Tyrant*. Berkley, Los Angeles, London: University of California Press.
- Lemarchand, René (1972) "Political Clientelism and Ethnicity in Tropical Africa: Competing Solidarities in Nation-building," *American Political Science Review*, Vol. 66, No. 1, pp. 68-90.
- Médard, Jean-François (1982) "The Underdeveloped State in Tropical Africa: Political Clientelism or Neo-patrimonialism?," in Clapham, Christopher (ed.) *Private Patronage and Public Power: Political Clientelism in the Modern State*. London: Frances Pinter.
- Muana, Patrick K. (1997) "The Kamajoi Militia: Civil War, Internal Displacement and the Politics of Counter-Insurgency," *Africa Development*, Vol. 22, Nos. 3/4, pp. 77-100.
- Reno, William (1998) *Warlord Politics and African State*. Boulder, London: Lynne Rienner.
- Richards, Paul (ed.) (2005) *No Peace, No War: An Anthropology of Contemporary Armed Conflicts*. Athens: Ohio University Press.